

『源平盛衰記』の文覚

——頼朝像形象との関わりから——

鈴木 彰

一 はじめに

文覚は、流人頼朝に後白河院の院宣を伝え、時代の転換を導いた人物として『平家物語』に登場する。とりわけ東国の動向を詳細に記す諸本群においては、文覚関係記事は頼朝挙兵語群の始発部ともなっており、相対的に古態を多く残すとされる延慶本を中心に、諸本それぞれが持つ歴史叙述への志向や物語の生成過程に関する問題などがそこから探られてきた。⁽¹⁾

ここで取りあげる『源平盛衰記』(以下盛衰記)の文覚記事については、赤松俊秀氏が延慶本研究の視座から諸本の様相を整理する中で、盛衰記の特色にも言及しているが、その後は渡辺貞麿氏や小林美和氏に代表されることく、主に独特な発心譚を軸に説話の生成基盤や社会的背景の探求という方向で議論が進展してきた観がある。⁽²⁾ 本稿では、様々な素材(先行本文を含めて)を斟酌・統括しつつ生成してきた盛衰記という作品において、文覚が如何なる機能を果たすべく形象されているかを探っていくことと

したい。盛衰記が他本に比べて極めて特徴的な文覚形象をなしていることは確かであり、本稿はそれらが指向するところの大枠をまずは把握することを目指すものである。なお、以下、盛衰記の叙述の特色を諸本展開相の中で相対的に捉えるため、延慶本との相違を視野に収めつつ論述を進めることとしたい。

二 両親追慕の情

盛衰記を読み進めるとき、文覚形象の特徴としてまず目を引くのが、その行動を亡き両親への追慕の情との関連で意味づけている点であろう。⁽³⁾

(I) 少ヨリ時々物狂ノ氣アリケリ。容顔ハ勝ザリケレ共、大ノ男ノ力強ク心甲也。武芸ノ道人ニ勝テ、道心モサスガ在ケルトカヤ、常ニハ母ガ難産シテ死ニケル事ヲ云テ泣、父ガ事ヲ恋テ悲ム。生年十八歳ニテ糸惜キ女ニ後テ、髪ヲ切テ遁世シキ。

(卷第十八「文覚頼朝勸進謀叛」)

盛衰記は文覚の経歴を語る中で、遁世の具体的契機を語る一文

(波線部)に先立ち、両親を追慕する常の姿を通して、彼がもとより「道心」を有していたことを窺い見る。盛衰記に特徴的なこの傍線部の表現は、引用部のすぐ前に存する文覚の出生・成長の過程を記す独自記事中の、「……父ハ六十一、母ハ四十三ニテ生タル一男也。母ハ難産シテ死ヌ。……父赤子ヲ抱テ歎ケル程ニ、……三歳ノ時盛光モ死ニケリ。堅固ノ孤兒也ケレ共……」といった表現を受けたものである。

ところで、こうした文覚の思いは、この後神護寺再建を發願する際にも、「宿因多幸ニシテ出家入道ノ身ヲエ、破壊ノ堂舎ヲ修補シ、無縁ノ道場ヲ相訪テ、一親之菩提ヲ助、平等ノ濟度ヲタレシコト、剃髮染衣ノ思出タルベシ……」(卷第十八「文覚勸進高雄」)の傍線部のごとく独自に繰り返され、更には、伊豆流罪の船中での文覚の言葉にも現れることとなる。

(II)……于時八大龍王座ヲ起、仏ヲ三匝シテ威儀ヲ調、尊願ヲ奉守テ三種ノ大願ヲ發テ云、「我願仏入涅槃後、孝養報恩ノ者ヲ守護スベキ。二我願仏入涅槃後閑林出家ノ者ヲ可守護。三我願仏入涅槃後可守護仏法興隆者。」此三ノ願ヲ心ニ案ズレバ、併文覚ガ身ノ上ニアリ。法師ハ加様ニ心急々ニシテ時々物狂ノ様ナレドモ、母ハ我ヲ生トテ難産シテ死ヌ、父ハ三歳ノ時別ヌ、憑方ナキ孤子ナレバ、幼キ子ヲ思フキケン父母ノ心ノ中、イカバカリノ事案ジケント思ヘバ、親ヲ思フ志今ニ不淺。妻ニ後テ出家入道スレドモ、本意ハ只至孝報恩ノ道念ヨリ起レリ。八大龍王ノ第一ノ願ニ答テ被守護ベキ身也。……

(卷第十八「龍神守三種心」)

文覚は領送使国澄との問答の中で、釈迦在世時の説法に際して八大龍王が發した「三種ノ大願」に自分が適っていることを述べ、龍王に守護される理由を説く。このやりとり自体は延慶本などにも存在するが、ここでは第一の願(波線部)を解釈する言葉、特に傍線部が目ざされよう。即ち、延慶本に「父ニモ母ニモ子ニテ候之間」(第二末「文学伊豆国へ被配流事」とあるのと比較してみても、盛衰記が文覚の親への思いを強く押し出した文脈を作り出していることは一目瞭然なのである。そしてこの表現が、先に引いた盛衰記特有の表現との具体的な対応関係を有しつつ、一連の文覚形象を担っていることも明らかであろう。こうした流れを踏まえるとき、文覚の本意の由来を語る二重傍線部の言葉には、延慶本のほぼ同様の表現とは、比重の異なりが存することを受け止めておかねばなるまい。

このように盛衰記には、親への追慕の情が文覚の行動を支えていることを語る、他本にはない脈絡が確実に形成されていることが知られる。確かにこれは盛衰記における多彩な文覚形象の一面に過ぎないのだが、こうした文脈は、この後彼によって拳兵に導かれる頼朝の描き方との関係において、特別な機能を果たしているようである。次節ではその点を吟味することとなるが、それに先立ち、盛衰記の性格を端的に示すものとして、『平家』諸本中では盛衰記固有の中国故事である曹公説話に注目しておきたい。本話は、文覚が頼朝に拳兵を決意させるべく、義朝の頸(但し偽物)を差し出す場面に続いて引用されている。

……昔ノ曹公ハ骸ヲ懷テ臥、今ノ頼朝ハヒザニ案ジテ泣。彼

ハ十五里ヲ去テ水神与之、是ハ廿余年ヲ經テ文覚持来レリ。
恩愛骨肉ノ情、トリ々、哀也。

(卷第十九「曹公母父骸」)

『孝子伝』等に伝えられ、日本でも広く流布している話だが、盛衰記の場合、その話末において、義朝の頸を膝に抱く頼朝と父の遺骸を懐く曹公とを類比し、傍線部のようにそれぞれ「恩愛骨肉ノ情」を窺い見ながら結ばれている点に特徴を有する。予め言えば、盛衰記の頼朝は義朝の子であることが他本に増して問題視されており、本話の位置づけも、そうした叙述姿勢の中で理解すべきものと思われるのである。以下、その点を具体的に検証していくこととしたい。

三 「相人」としての文覚

伊豆に流罪された文覚は、やがて頼朝と対面することとなる(卷第十九「文覚頼朝対面付白首事」)。盛衰記は両者の対面に至る経緯を独特に綴っており、その特徴としてまず注目できるのが、文覚の「相人」としての側面が色濃く提示されていることである。

(a) 文覚配流ノ後籠居シタル処ヲバ、奈古屋寺ト云。本尊ハ観音、大悲ノ靈像也。効験無双ノ薩埵也ケレバ、國中ノ貴賤參詣隙ナシ。其上文覚、「我目出キ相人也」ト披露シケレバ、事ヲ御堂詣ニヨセテ、男女多ク人集テ相セラル。向後ハ知ズ、過コシ方ハ露違ハズ。「有難相人也」ト云。

「目出キ相人」であることを公言した文覚の元へ、多くの人々が集まり、確かに「有難相人」との評価を得ていたことが語られ

ている。右二重傍線部は延慶本などの他本には見えないのだが、この直後に続く、

(b) 兵衛佐殿ハ、胡馬北風ニ嘶へ越鳥南枝ニ巢習ニテ、都ノ人ノ床シサニ、行テ物語シ身ノ相ヲモ聞バヤト思召ケレ共、人目モイブセク機嫌モ知ザリケレバ、思ナガラサテノミ過ル程ニ……

という叙述へと本文を読み進めるとき、この後の頼朝・文覚の対面を文覚の「相人」としての側面を鍵として語ろうとする盛衰記独自の志向が窺い見えてくるのである。そして実際、両者の最初の対面を盛衰記は次のごとく描いていくこととなる。

(c) 文覚ハ目モ懸ズ詞モ出サズ、佐殿ノ御座スル処ヲ、黒脛カ、ゲウワゲバハキテ前へ後へ通行事四五返シテ後ニ、障子ノ内ニ入テ頭バカリヲ指出シテ、両目ニテハ睨片目ニテハ睨、立上テハ睨サシウツブキテハ睨。佐殿ハ、今ヤ打く、イカニ打共コラヘナン、実ニ堪へ難ハ逃テント被_レ思テ、面モ損セズ身モハタラカサズ、極刷テ良久御座ケル。文覚ハ遙ニ加様ニタメ見テ、障子ヲサトアケテ佐殿ノ前ニ出合テ、「戯呼、御辺ハ故下野殿ノ三男トコソ見奉レ。歳ノカサナルトテ以外ニクマミ給ケリ。糸惜く」トテ、ヤガテハラくト泣テ、切テ継タル様ニアナガチニ畏テ礼儀シケリ。

文覚は訪問者を様々に眺め回し(二重傍線部)、彼が「故下野殿ノ三男」であることを言い当てる(傍線部)。延慶本の場合、両者の最初の対面は、文覚の立てた湯屋を頼朝が訪れる形となっており、文覚は小童部共が「兵衛佐殿コソオハシタレ」と囁き合うのを聞

き、頼朝の供の者に「是ハ流サレテオウシマスナル兵衛佐殿敷」と問いかける。そこには右のごとき文覚の姿はなく、盛衰記が「相人」という側面の描出に意を用いたことは、そうした延慶本との対照性の中からも鮮明化しよう。また、「相人」文覚の役割は、訪問者が義朝の子たることを直接言い当てること（傍線部）に始発する点には注意しておきたい。

さて、文覚はこれに続けて頼朝の別の側面を相することとなる。すなわち、文覚は頼朝の行く末を「国ノ主」という言葉で述べるのである。

(d) 文覚良有テ云ケルハ、「法師日本国修行シテ在々所々ニ六孫王ノ末葉トテ見参スルヲ見ルニ、大将ト成テ一天四海ヲ奉行スベキ人ナシ。或ハ心勇テ人思付ベカラズ、或性穩シテ人ニ無二威応一。穩シテ威ナキモ身ノ難也。勇テ猛キモ人ノ怨也。

サレバ威応アリテ穩シカランハ国ノ主ト成ベシ。殿ヲ見ルニ、心操穩シテ威応ノ相御座。是ハ者ノ思付相也。項羽ハ心奢テ帝位ニ不_レ登、高祖ハ性ヲダシクシテ諸侯ヲ相從ヘリ。御辺ハ後憑シキ人ヤ、目出シノく一ト嘆タリ。

こうして頼朝を二つの側面から相する最初の対面を経て、文覚は二度目の対面の場得意いよ上舉兵を勧めることとなる。その言葉は次のようにある。

(e) 文覚重テ申ケル、「良佐殿、源平両家ハ相互ニ一天ノ守護、

四海ノ將軍タリキ。……今ハ何事カ侍ベキ。御辺ハ大果報ノ

後憑シキ人也。文覚相シ損ジ奉ルマジ。法師ガ日凡夫ノ眼ニ

非ズ。……疾々謀叛ヲ発シ平家ヲ打亡シテ、父ノ恥ヲモ雪メ、

国ノ主トモ成給へ。……」ト、細々と申。

傍線部をみれば、この言葉が先に述べた内容（引用(c)、(d)）を踏まえていることは明らかであろう。また、これに関連して、延慶本の傍線部が、「父祖ノ恥ヲモ雪メ、君ノ御鬱ヲモ休奉リ給へ」とあることとの相違にも目を配っておきたい。

以上のように、盛衰記には、文覚が頼朝に対して、父義朝のことと、「国ノ主」という行く末とを繰り返して直接語りかけるといふ流れが見いだせるわけだが、これを受けて更に注目すべき設定が施されている。それは義朝の頸を差し出す記事の位置付けである。延慶本はこれを「又四五日アリテ、文学来リケレバ、佐被出逢ケリ。「イカニ」ト宣ヘバ、文学懐ヨリ、白キ布袋ノ持ナラシタルガ、中ニ物入タルヲ取出タリケレバ……」（第二末「文学兵衛佐ニ相奉ル事」と、二度目の対面から「四五日」の時を隔ててのこととするのだが、盛衰記は引用(e)の言葉を受けて躊躇する頼朝の姿に続け、文覚が即座に頸を取り出したとするのである。

(f) 文覚懐ヨリ白キ布袋ノ少シ旧タルニ裏タル物ヲ取出シテ、

「ヤ、佐殿、是ゾ故下野殿ノ御首ヨ。……（中略）頸を盗み、隠

し持っていたこと……伊豆国へ被_レ流ベキト聞シカバ、定テ見

参シ奉ランズラン、サテハ進セントテ、頸ニ懸テ下タリキ。

日比ハ次デ悪ク侍ツレバ、庵室ニ置奉テ候キ。国コソ多所コ

ソ広キニ、当国ヘシモ被_レ流ケルハ、然ベキ佐殿ノ父ノ骸ニ

見参シ給ベキ事ニコソ候へ。其進セン」トテ、ハラノくト泣

ケリ。

前述のごとき設定に加えて文覚がここで、自らの流罪を傍線部の

ごとく意味づける点も看過できまい。先に義朝の子であることを言い当て、「父ノ恥」と述べたことを受け、頼朝の追慕の情に効果的に訴えかける文覚の行為であり、言葉であると見えよう。続いて頼朝の姿が次のように示される。

(g)兵衛佐殿是ヲ見テ、一定トハ不知ドモ父ノ首ト聞ヨリイッシカナツカシク思ツ、泣々是ヲ請取テ、袋ノ中ヨリ取出シテ見給ヘバ、白曝タル頭也。膝ノ上ニカキ据奉テ、良久ゾ泣給フ。此下野守ニハ子息アマタ御座セシ中ニ、兵衛佐ヲ鬼武者トテ、十バカリマデモ膝ノ上ニ居テ愛シ給シ志ノ報ニヤ、今ハ其骸ヲ請取テヒザノ上ニ置奉テ、昵ジク覚エ、其後ゾ深合体シ給ケル。「志合則胡越為昆弟、由余・子臧是。不合則骨肉為讐敵、朱象・管蔡是。只志ヲ明トセリ、必シモ親ヲ明トセズ」トゾ、文覚恒ニハ申ケル。(前掲曹公説話)

頼朝は、自らを「十バカリマデモ膝ノ上ニ居テ愛シ」たという父義朝の恩愛を回想し、その思いの中で文覚と「深合体」するに至る。それは波線部の言葉に象徴されることとき「志」の結合であった。そしてこれに続くのが、前節末に引いた、父に対する頼朝の「恩愛骨肉ノ情」を語るべく位置付けられた曹公説話なのである。

右に示された「志」について、盛衰記は曹公説話を挟んで次のように記している。

(h)文覚佐殿ニ申ケルハ、「我神護寺造營ノ志アリテ院御所ヲ勸進シ奉リシニ、辛目ミルノミニ非ズ、流罪ノ宣ヲ蒙ル時、心中ニ発願ノ占形ヲスル事ハ、我必神護寺ヲ造營成就スベキ願

望ヲトゲンナラバ、配所ヘ下着マデ断食センニ死スベカラズ。其事難叶ナラバ、途中ニ骸ヲサラスベシト誓タリシガ、仏神加護シテ建立成就スベキニヤ、卅一日ニ此所ニ下着シタリ。トクク平家ヲ打亡シテ後、且ハ父ノ菩提ノタメ、且ハ文覚ガ本意ノ如、大願ヲ果シ給ヘ」トイヘバ……

(巻第十九「文覚入定京上」)

両者の志が、神護寺造營という文覚の「大願」を媒介として一つとなったことを語る、他本には見えない言葉である。注目すべきは、ここで文覚がやはり「父ノ菩提ノ為」と述べている点である。如上の流れを読み解くとき、頼朝の、父義朝への情を鍵として文覚との対面から挙兵決意への過程を綴ろうとする盛衰記の姿勢が浮上してくるのである。

加えて、右引用(h)の傍線部に見える「文覚ガ本意」が第二節引用(ii)の二重傍線部に見たごとく、文覚の両親への思いに導かれたものであったことを想起する時、この傍線部は、亡き親を追慕する両者の精神面での重なりを示唆し、その結束をより密なものとして印象づける表現と言えよう。前節で述べた両親への追慕の情を懐く文覚形象は、特徴的な「相人」としての形象と相俟って、頼朝との連帯関係をより強固なものとして描き出そうとする盛衰記の志向を反映したものであることが判然とするのである。

四 後白河院への意識

さて、本節では視線を転じ、盛衰記の文覚形象を別の角度から照らし出してみたい。

盛衰記では他本に比べて圧倒的な量の言葉を文覚が口にする。

特異な設定を施す頼朝との対面場面はさておき、延慶本とほぼ同様の記事展開を示す神護寺再建の勸進から伊豆流罪の過程を対照すれば、その顕著さは明らかとなる。

(イ)文覚「罷出マジ。院中ノ御助成ヲ憑進テコソ、此大願ヲモ思立テアレ、只空テイデン事ハ大願ノ空ナルニテ有ベシ。大願空ク成ナラバ命生テ無要也。同死ル命ナラバ、大願ノ代ニ死ベシ。死骸ヲ朝廷ニサラシテ面目ヲ閻魔ノ庁ニ施事、身ノ幸也。造宮ノ有無、唯法皇ノ御計タルベシ。五畿七箇道所ヒロシ、ナドカ荒郷一所給テ、貧道破壊ノ伽藍ヲ助給ハザラン。

詩歌管絃ハ今生一旦ノ遊、卿相雲客モ現世片時ノ臣也。イツマデカ伴、イツマデカ斲給ベキ。無常ノ風ハ朝ニモ吹、夕ニモ吹。期明日御坐ベシヤ。暫長夜ノ御眠醒奉ン為ニ、聊妙法ノ音ヲアゲテ勸進帳ヲ読侍ル。全ク僻事ニ非。浅猿田夫野人ダニモ程々ニ随テ後生ヲバ恐侍ゾカシ。況万乗ノ国主トシテ聖衆ノ来迎ヲ期シ給ハザランヤ。文覚方所持刀ハ人ヲ切ントニハアラズ、放逸邪見ノ鬼神ヲ切、慳貪無道ノ魔縁ヲ払トナルベシ。是文覚方刀ニ非ズ、大聖文殊ノ知恵ノ劍也。不動明王ノ降伏ノ劍也。文覚更ニ悪事ナシ。上求菩提下化衆生ノ方便也。トクく一分ノ慈悲ヲタレ給へ」トテ、護法ノ付タル者ノ様ニ躍上ノテ出ザリケリ。

(ロ)文覚ハ悲キ目ヲ見タレ共少モ口ハヘラズ、門外ニ引張レナガラ御所ノ方ヲ睨ヘテ、「天子ノ親トモ覚ズ、死生不知ノ事セサセ給ヌル者哉。袈裟カケ衣着タル僧ノ発心修行シテ造宮

濟度セントスルヲ、打張、ソ頸突トハ宣ベシトモオボエズ。

懸ル悪王ノ代ニ生合ケル文覚ガ身ノ程コソ不当ノ奴ニテハ侍レ。……況文覚ト云ハ、発菩提心ノ後淨行持律ノ聖也。興隆仏法ノ勸進也。返々モ口惜キ事セサセ給ヘル君哉。賢王明德ノ道ハ幣民ヲ育ヲ以テ先トス。況剃髮染衣ノ僧ヲヤ。ソレニ打擲刃傷ニ及条、希代ノ不思議也。世ハ已ニ末世ニナリ極レリ。穴無慙ノ人共ヤ。夢幻ノ栄花ヲノミ面白キ事ニ思テ、三途常没ノ猛火ニ焦ン事ヲ不知。……(中略*)……サリ共後悔コソシ給ハンズラメ」ト、御所中響ケト叫ケリ。

(共に巻第十八「仙洞管絃」)

(イ)は法住寺殿からの退出を拒絶する場面、(ロ)は捕縛され法住寺殿から引き出される場面である。延慶本当該部分の言葉が順に、(イ)「只今ニ罷出テハ、イツクニテ誰ニ此事ヲ申ンゾ。サテアランズルヤフニ、命ヲ御所中ニテ失トモ、神護寺ニ庄ヲヨセラレザラムニハ、一切罷出マジキ者ヲ」、(ロ)「奉加ヲコソシ給ハザラメ、文学ニカラキ目ヲミセ給ツル報答ハ、思知ラセ申サンズルゾ」とあるに止まるのを見れば、その分量の差は明白である。こうした言葉多き文覚の形象に関連して、盛衰記では文覚の声色・言葉遣い・口数に関する表現が多用されている事実は看過できない。「コキ墨染ノ奇ニ思モヨラヌ大法師、調子乱ル、大音ニテ、片言ガチナル勸進帳ヲ読タレバ、」(「仙洞管絃」)、「其後一門ノ者共ニ向テ、目ヲ見ハリ噴声ニテ云ケルハ、」(巻第十八「同人清水状・天神金」)、「去バ「角ナ宣ソ」ト制シケレドモ、文覚ハ念珠押捺、大ノ声ノシハガレタルヲ以テ申ケルハ、」(巻第十八「龍神守三種

心」)などはその一部である。

また、盛衰記では「悪口」という語が文覚に関して多用されている点も、一連の現象かと思われる。延慶本の一例(全七例)、覚一本の二例(全三例)に対し、盛衰記では十三例(全二十五例)である。用例数全体が多いことには注意する必要があるが、一個人に関してこれほど多用されることは他になく、やはり言葉多き文覚を形象しようとする姿勢との関連を受けとめることができるのではなからうか。

こうした叙述が、言葉を巧みに操る勸進聖の実態的な活躍を背景として成り立ち得ていることは確かであろう。但し、盛衰記は単に巧みなる口わざを持つ勸進聖としての文覚像を明確化しようとしたものとは思われない。文覚の言葉には一つの傾向が看取できるのである。改めて、引用(イ)・(ロ)を振り返ってみよう。

(イ)で文覚は冒頭から神護寺造営という「大願」を繰り返し(傍点部)、それは「法皇ノ御計」が鍵を握るものであることを述べている(二重傍線部)。続く言葉も引用傍線部に注意すれば、後白河院を強く意識したものであることが知られよう。また、(ロ)の言葉も同じ姿勢に貫かれていることは傍線部に明確なのである。もちろん、これが後白河院への勸進である以上、そうした傾向を持つことは自然とも言えるが、これ程顕著な傾きを見せない延慶本との相違は容易には見逃せまい。また何より、心なき後白河院への意識はこの後も文覚の行動となり、言葉となつて、盛衰記の中に特記されていくことの意味は重要であらう。

(ハ)……勸進スル事如一元。法皇ノ御助成ノナキ事ヲ安カラズ思

テ、京中・白川・大路・門、人ノ集リタル所ニテハ淺増キイマノシキ事ヲノミゾケル。黒衣ノ裳短ニ、黒袴脛高二着、同色ノ袷裳懸テ、太刀ヲ腰ニ横ヘ、指繩緒ノ平鞆ハキテ、勸進帳ヲ手ニ、ギリ、世ニモ恐れズ、口モ、ヘラズ、知モ、知又モ、人ニ会テ云ケルハ、「コ、ノ闕タルハ院ノ所為ヨ。頭ノ腫タルハ法皇ノ所行ゾカシ。蒸物ニ合テ腰ガラム」トテ、法住寺殿ノ御所ノ前ヲ東西南北ニラミ廻リテ、「官位ヲ高砂ノ松ニヨソヘテ祝トモ、春降雪ト水泡、消シ事コソ程ナケレ。輪王位高ケレド七宝終身ニソハズ。況下界小国ノ王位ノ程コソ危ケレ。十善帝位ニ誇ツ、百官前後ニ随ヘド、冥途ノ旅ニ出ヌレバ、造レル罪ゾ身ヲ責ル。南無阿弥陀仏ノ、イツマデノ。春夏ハ早、秋冬ハ洪水、五穀ニハ実ナラズ、五畿七道ハ兵乱、家門ニハ哀声、臣下御相煩テ君憂目ヲ見給ヘシ。世中ハ唯今ニ打返ンズル者ヲ。安キ程ノ奉加ヲナ、阿弥陀仏ノ」ト高念仏申テ、「因果ハ糾纏ノ如。人ニ辛目ミセ給ヘル代ハ、去共ノ」トテ上下ニ通ケレバ、及天聰、公卿會議アリテ……

(卷第十八「仙洞管絃」)

ひとたび赦免された後、文覚は勸進活動を再開する。その姿を盛衰記は右のように語るのである。特に傍線部には後白河院への恨みの念が表出している。自らの傷を口にする部分は、情に訴える勸進聖一般の行為を透視させはするが、一連の文脈は明らかに強固な対後白河院意識に貫かれていると言えよう。当該部分の延慶本が、

……如元ニ勸アリキケリ。サラバタゞモナクテ、「此ノ世ノ

中ハ只今ニ乱レテ、君モ臣モ皆滅ナムズル者ヲ」ナド、サマ
くノ荒言放テ、イマノシキ事ヲ云アリキケル。無常讀
ト云物ヲ作テ、「三界ハ皆火宅也。王宮モ其難ヲ不可通。十
善ノ王位ニ誇タフトモ黄泉ノ旅ニ出ナフ後ハ、牛頭馬頭ノ杖
柳ニハサイナマレ給ハフズラフハ」トテ、院ノ御所ヲ左サマ
ニハニラミテトナリ、右サマニハニラミテトナリケルアヒダ、
「猶奇怪ナリ」ト云沙汰有テ、……

(第二末「文学院ノ御所ニテ事ニ合事」)

と、文覚の口にする「荒言」「イマノシキ事」への注目を見せ
つつも、主に文覚の「奇怪」さを言う文脈へと収斂しているのと
は、様相を異にしているのである。

この他、盛衰記では、「放免ドモ」「悪キ僧ノ詞カナ。奴原トハ
何事ゾ。イザ咎ン」ト云ケルヲ、其中ニ制シテ、「暫一天ノ君ヲ
ダニモ悪口申物狂也。天狗ノ様ナル者ナレバ何トモイヘ、人々敷
者ニイハレテコソ恥ニモ及ベ……」(巻第十八「同人清水状・天神
金」)、「係シカバ、元来天狗根姓ナル上ニ、慢心強ク高声多言ニ
シテ、人ヲ人トセザリケル余リ、院御所ニテ悪口ヲ吐、預勸被
流罪ケリ」(巻第十八「龍神守三種心」)のように、独自の記述の中
に後白河院を「悪口」したが故に流罪されたという表現が定着し
てもいる。先に引用した頼朝と文覚の結束を語る記事(第三節引
用④)中の、「文覚佐殿ニ申ケルハ、「我神護寺造管ノ志アリテ院
御所ヲ勸進シ奉リシニ、辛目ミルノミニ非ズ、流罪ノ宣ヲ蒙ル時、
心中ニ発願ノ占形ヲスル事ハ……」¹⁵⁾という表現は、こうした流れ
をも踏まえた言葉なのであった。

以上のように、文覚に後白河院への恨み言を繰り返させること
によって、盛衰記では両者の距離が決定的なものとして印象付け
られている。言葉多き文覚像を形作るうとする志向はそこに由来
すると考えられるのだが、文覚の対後白河院意識の濃さは、より
広い視野から見れば、神護寺造管という課題を挟んで、頼朝と後
白河院の対比という問題へと収斂していくようである。視線を福
原院宣授受の場面に移すことしよう。

五 頼朝像の形象

文覚は後白河院の院宣を受け、福原から伊豆へ戻る。但し、盛
衰記の文覚は、「院宣ハヨクノ申サバ賜氣也。今ハ安堵シ給ヘ。
勢ヲ語ヒ給ヘ」と、恰も院宣はまだ手にしていないかのごとくに
述べる。そして、この状態での拳兵をためらう頼朝に、文覚は次
のように語りかけ、一つの駆け引きを挑むのである。

文覚ハ「申固メテ下タリ。肝ヲツツシ給フゾ。法皇ノ仰ニハ、
『頼朝左様ニ憑シク申ナレバ、子細ニヤ』ト被仰出タリ。又
京上コソ煩シケレ共、佐殿ノ本意ノ叶フカナハヌラバ、唯文
覚ガ計ヒ也。其ニ取テ、我此國ハ被流罪事モ高雄ノ神護寺造
立ノ故也。又院宣ヲ給ラン事モ、御辺ノ力ニテ彼寺ヲヤ造ル
ト云所存也。サレバ院宣ヲ急ギ給ラント思給ハ、高雄ハ庄
園ヲ寄進有ベシ」ト云ケレバ……(巻第十九「文覚入定京上」)

文覚はここで神護寺造管のために、莊園寄進を求める。そして、
自らの立場を思い戸感う頼朝に「唯文覚ガ計ニ随テ、ハヤ寄給
ヘ」と言葉を連ねる。以下のやりとりを引こう。

佐殿ハ「我軍二勝テ日本国ヲ手ニ把バ、一国二国ヲモエニヨルベシ」ト宣ヘバ、文覚ハ「手ニトリ得ツレバ必惜キ事也。ナキ物ハ惜カラズ。国モ広博也。唯所知ヲ十余所寄進シ給ヘ」トテ、紙硯取向テ、丹波国ニハ新庄・本庄・雀部・宇津・ナウ野、播磨国ニハ五箇庄、土佐国ニハ高賀茂郷ヲ始トシテ、十三箇所ヲ撰出シ、「ソレク」ト云ケレバ、佐殿鼻ウソヤキテハ被思ケレ共、寄進状ヲ書判形ヲ加テ、文覚ニ給フ。文覚ホクソ咲テ、「ア、御辺ハ以外ニ心広キ人、我物顔ニイミジク寄給ヘリ。其荒涼ニテハ一定天下ノ主ト成給ナン。サラバ院宣進ツラン」トテ、懐ヨリ文袋ヲ取出シ、中ナル院宣ヲ進ル。

(卷第十九「文覚入定京上」)

頼朝は最終的に寄進状を書き、文覚はその頼朝を「一定天下ノ主ト成給ナン」と評する。ここでの文覚の姿勢は法住寺殿でのそれと同様の目的意識に貫かれており、従ってここから、先に寄進を拒否した後白河院と今の頼朝との対照性が明瞭に浮かび上がることもなつてこよう。前節までに述べたところを改めて振り返るならば、盛衰記はここに至るまでの叙述において、親を追慕する姿を結節点として頼朝と文覚の精神的連帯を強調し、その一方で心なき後白河院への恨み言を文覚に繰り返し語らせることによつて両者の間の決定的な距離を表現していた。そうした文覚関連の盛衰記特有の文脈は、ここで文覚が頼朝をやがて「天下ノ主」となる者として位置づけ、後白河院との対照性を導き出すこと⁽¹⁶⁾において、一つに融合しているとみなされるのである。

こうした事実は盛衰記の文覚形象を支える力が、単に文覚個人

への関心のみならず、頼朝の位置付けという課題と連動して生じたものであることを示唆するものと言えよう。それに関して、文覚の発した「天下ノ主」という言葉が、これに先だつ頼朝との二度の対面において文覚が用いた「国ノ主」という言葉(第三節引用(d)・(e))と響き合うものであることは看過できない。参考までに延慶本を振り返れば、文覚が相した頼朝の将来は、「頼朝ト云名ノ吉ゾ。大將軍ノ相モオワスメリ」(引用(d)相当部)、「殿ハサスガ末タノモシキ人ニテオワスル上、高運ノ相モオワス。大将ニ可成給相モアリ……今ハ何事カハ有ベキゾヤ。謀叛発シテ、日本国ノ大將軍ニ成給ヘ」。……イカサマニモ殿ヲバ大果報ノ人ト見申ゾ」(引用(e)相当部。共に第二末「文学兵衛佐ニ相奉事」)のように、「大將軍」という言葉を軸に見通されており、盛衰記とは隔たりを見せている。既に確認したように、特に盛衰記の文覚の頼朝に対する言葉は前を踏まえる形で緊密に展開しており、加えて延慶本とのこうした相連をも視野に入れると、盛衰記がこの段階で、「頼朝の行く末を「国ノ主」「天下ノ主」という概念において特記していることは大いに注目に値するであろう。

そこで改めて文覚の言葉に立ち返ってみると、次のような言葉の存在に気がつく。

(A)「……穴無慙ノ人共ヤ。夢幻ノ榮花ヲノミ面白キ事ニ思テ、三途常没ノ猛火ニ燃シ事ヲ不知。只今文覚ガ加様ニセラル、事ハ全ク身ノ恥ニ非ズ。臣下卿相ヲ始トシテ己等ガ恥ト思給ベシ。但後生マデハ遙也。遠ハ三年、近ハ三月ガ中ニ、思知セ申サンズルゾ。サリ共後悔コソシ給ハンズラメ」ト御所中

響ケト叫ケリ。

(卷第十八「仙洞管絃」)

捕縛されて法住寺殿から引き出される際の言葉(第四節引用(中略*部に位置))であるが、後白河院の寄進がないことを受け、文覚はそれを「遠ハ三年、近ハ三月」の間に思い知らせようと語る。右引用部のみを見ると御所中の人々一般に向けられた言葉のごとくだが、引用口が特に後白河院を意識した言葉であったことを考慮すれば、やはり主として院に向けられた言葉とみて相違あるまい。そしてこの一節は、文覚関連話の直前に位置する安達盛長の夢見話中の次の部分(傍線部)と重なっているのである。

(B) 或夜ノ夢ニ藤九郎盛長見ケルハ、……盛長此事兵衛佐ニ語ル。景義申ケルハ、「夢最上ノ吉夢也。征夷將軍トシテ天下ヲ治給ベシ。日ハ主上、月ハ上皇トコソ伝ヘ奉レ。今、左右ノ御脇ヨリ光ヲ比給ハ、是國王猶將軍ノ勢ニツ、マレ給ベシ。東ハ外浜、西ハ鬼界島マデ帰伏シ奉ベシ。酒ハ一旦成酔、終ニサメ本心ニナル。近ハ三月遠ハ三年ニ酔ノ御心醒テ、此夢告一トシテ相違事ハ有ベカラズ」トゾ申ケル。

(卷第十八「文覚頼朝勸進謀叛」)

延慶本には盛長夢見話に関してはほぼ同文が存するものの、法住寺殿での言葉(引用(A)相当部)は「奉加ヲコソシ給ハザラメ、文学ニカラキ目ヲミセ給ツル報答ハ、思知ラセ申サンズルゾ」(第二末「文学院ノ御所ニテ事ニ合事」とあるのみで、こうした対応関係は認められないことをまずは指摘しておく。その上で安達盛長の盛衰記における役割に注目してみたいのだが、盛衰記の盛長は文覚・頼朝の最初の対面に先だって、両者の間を往復し、双方の

意志を伝達するという特別な役割を担われているのである。

文覚ガ庵室ト兵衛佐ノ館トハ無下ニ近程也ケレバ、藤九郎盛長ヲ以テ、先文覚ガ弟子ニ相照ト云僧ヲ被招ケリ。……(中略・文覚の情報を仕入れ、対面の意志を伝える)……相照庵室ニカヘリテ、此由文覚ニ語ケレバ、「来給ヘカシ」ト云。相照又立帰テ佐殿ニ申セバ、守長ヲ召具シテ上人ガ庵室ヘ渡給フ。

(卷第十九「文覚頼朝対面付白首」)

当然、初対面の設定を異にする他本にはこうした役割は見られない。頼朝に仕える盛長の実態的な立場との兼ね合いを考慮する必要もあるが、既に検討しような、この対面記事を支える盛衰記の濃厚な志向性や、夢合と文覚記事が接続しているという構成面を勘案しても、ここに盛長が選ばれていることは見逃しがたい事実であろう。盛衰記が夢合の記事と、続く文覚の言葉とを共鳴させ、頼朝の行方を語る文脈を多角的に形作ろうとしていた可能性は高いのではなからうか。

ここに至って、本稿で検討してきた独特な文覚形象を導く力の根元には、その勧めによつて拳兵し、やがて国を掌握していく頼朝を如何に叙述し、形象するかという、より大きな課題が存在することが明らかになったものと思うのである。

六 おわりに

盛衰記における頼朝の行方とはすなわち、文覚の言葉に言う「国ノ主」「天下ノ主」であり、夢合記事で「國王猶將軍ノ勢ニツ、マレ給ベシ」(波線部)と表現されるような存在である。拳兵段階

で上述のごとく規定された頼朝が、その後如何に記述されていくかは今後更に検討を加える必要があるが、まずは「同晦日解官并流人宣旨被下ケリ。……威君僭臣コト不異平将。……去二十七日可預議奏人々トテ、関東ヨリ交名ヲ注進ス。……今度源二位注進ノ状ニ入人ハ其威ヲ振、不入人ハ失其勢。世ノ重ジ人ノ帰スル事平将二万倍セリ」(巻第四十六「關官恩賞人々」)等の具体的な表現を論拠とし、盛衰記終結部の頼朝が、朝廷を威圧し、清盛をも凌ぐ権力を掌握した驕れる存在として記されているとの榊原千鶴氏の指摘を踏まえる必要があるだろう。つまり、終結部のそうした頼朝像は、実は拳兵段階の文覚の言葉において既に提示されていたものなのである。従って、これらを見渡すとき、盛衰記の頼朝像がより広いところで一つの像を結ぶわけで、本稿で検討してきた文覚形象の諸相は、総括的な頼朝形象を支える盛衰記の歴史認識との関わりの中から様々に導き出されたものであったことが窺い知られるのである。

百科全書などとも評され⁽¹⁸⁾、個々の説話や表現に伝承世界や管理圏等を探る方向でのアプローチがなされることの多い盛衰記だが、その一面には独自の歴史を構築する志向を持ち、緊密にその叙述を織りなしている作品であることを忘れてはなるまい。着実に探究が進展しつつある管理圏や生成基盤と、盛衰記の歴史語りの志向、作中に描き出されている歴史像とが、どの程度、如何に交わるのかといった問題は、この作品を纏め上げていく力の質を解明するためには避けられない課題であろう。また、盛衰記を基点として『平家物語』の諸本展開相を探る意味も小さくはなからう。

文覚形象を通して盛衰記の求心的な叙述を支える、頼朝像形象への志向というひとつの力を照射した本稿を経て、今後更に多角的な視座からそうした課題に取り組んでいくこととしたい。

注(1) 小林美和氏「延慶本平家物語における文覚・六代説話の形成」

『論究日本文学』39 一九七六・三三、「文覚発心譚再考(上)」

(中)『青須我波良』39、42 一九九〇・六、一九九一・二二)

砂川博氏「頼朝拳兵由来譚の表現構造」(『日本文学』)33 16 一九

八四・六、「延慶本平家物語における伝承とその受容」(『北九州大

学文学部紀要』43 一九九〇・一一)等。

(2) 「文覚説話が意味するもの」(『文学』)38 19、10 一九七〇・九、

一〇)

(3) 『平家』における文覚像とその背景」(『文芸論叢』)2 一九七

四・三三、『平家』文覚譚考」(『大谷学報』)59 14 一九八〇・二二)

(4) 「文覚説話の展開」(『平家物語生成論』)収 一九八六・五 三弥

井書店、「源平盛衰記」の武勇譚」(『伝承文学研究』)46 一九九

七・二)

(5) 佐伯真一氏「勸進聖と説話」(あなたが読む平家物語2『平家物

語 説話と語り』収 一九九四・一 有精堂)等。

(6) 鷲山樹心氏「文覚発心説話考」(『禪学研究』)58 一九七〇・三三

は、こうした記述と発心譚との齟齬を指摘する。

(7) 盛衰記の引用は慶長古活字版の影印本を参照しつつ、松尾葦江氏

他校注「源平盛衰記」(三弥井書店)により、一部句読点等を改めた。誤脱を除き、内容に関わる蓬左文庫蔵写本との決定的な異同は

ない。

(8) 延慶本はここから発心譚へ続ける。盛衰記の発心譚は位置を大き

く違えており、文覚の伊豆到着を語った後(巻第十九巻頭)に位置

付けられている。それに伴い、女故の発心という色がこの段階では

相対的に薄くなっている点に注意したい。

(9) 黒田彰氏「静嘉堂文庫藏孝行集について」『説話論集』第一集

一九九一・五に研究史を含め、詳細な言及がある。

(10) 波線部は延慶本では第四「文覚ヲ便ニテ義朝ノ頸取寄事」に存在する。この句を記す際の、両本の志向差は鮮明であろう。

(11) 盛衰記では義朝の本物の頸が届けられた際の様を福原院宣の後に記すが、その末尾に「後ニコソ角ハ有ケレ共、初二ハ父ノ首ト語ケレバ哀ニ嬉覚テ、上人ニ心ヲ打解テ、此院宣ヲバ給ケリ」という独自の一文を持つのも、これと関連しよう。

(12) 延慶本にも「究竟ノ相人」という表現が見え、相人としての文覚の姿は存在するのだが、盛衰記がそれとは異なるところに文覚像を結んでいることは明らかであろう。早川厚一氏『平家物語』の成立(『国語と国文学』74-11 一九九七・一一)参照。

(13) 本稿引用中、傍点線を付した表現がその具体例の幾つかである。

(14) 渡辺氏注(3)、佐伯氏注(5)等。

(15) 盛衰記では上西門院の崩御を、文覚の獄中での祈念を受けて、「サレバニヤ、上西門ノ女院、指タル御惱モマシマサズシテ御寝ナ

ル様ニテ隠レサセ給ニケリ」と記す。『愚管抄』『玉葉』などから知られる後白河院との親しい姉弟関係を想起すると、こうした独特な叙述も対後白河院意識の中で把握できるのかもしれない。

(16) 延慶本の文覚は「平家ヲ呪詛シケリ」と記されたり、頼朝がみた「平家ノ人々ノ首」が掛け並べられた夢を解いたりする(共に第二末「文学兵衛佐二相奉ル事」)が、これらを持たない盛衰記には対平家色が薄いことも関連して指摘しておく。

(17) 『源平盛衰記』の頼朝(『日本文学』42-6 一九九三・六)
(18) 松尾葦江氏「源平盛衰記素描」(『国語と国文学』54-15 一九七七・五)

〔付記〕紙幅の関係で先行論文の副題を省略させて頂いたことをお断りします。

本稿は、一九九七年二月六日(土)に行われた説話文学会・仏教文学会合同例会(於 文教大学)での口頭発表に基づくものである。席上並びに発表後、様々なご意見を賜った諸氏に御礼申し上げます。

新刊紹介

小峯和明著 岩波セミナーブックス69

『中世説話の世界を読む』

本書は、岩波市民セミナーの講演をもとにしての。内容は、四部構成である。第一部「説話のかたちをつかむ」では、説話研究の現在の状況とその問題点に始まり、

説話とは何かを、語義・歴史・機能・説話の生まれる場などの点から解説する。第二部「説話に時代を読む」では、具体的に天狗と怨霊を取り上げ、説話の背景に潜む時代という問題を考察する。第三部「説話のイメージ・シンボルをさぐる」では、こうもり・瓜を例に、説話の背後に存在する「もの」のイメージ(属性)を考える。第四部「説話に宇宙をみる」では、「山芋が鱧になる」などを例に、物の変化・変身・

転生を、次いで中世の世界観を支える須弥山を取り上げ、説話は生命・世界という根源的な問題を考える端緒であるとする。本書は、一般の読者に豊饒な説話世界の広がりや深みを知らしめる。また、今までの説話の概念を打ち砕き、新しい説話学を目指しており、研究者にも啓発的な必読の書となっている。
平10・1 岩波書店 四六判 一八二頁 二〇〇〇円
〔渡辺麻里子〕